る玉の數、本末に二枚、それゟ三枚四枚、大にいたりては八枚迄もいるゝ、あり、まづ大概手元の玉を内ぶくらにして、外をろくにす、末の玉も同斷、大ニいたりて中にいるゝ隔の玉は、いづれも常の目がねのごとし、されば眼に覆ふ目鏡の玉は、外にふくらあれば物をちかく見する、影にむかふ鏡の面、上にふくらあれば、物をちいさく間遠に見せ、又ゑやくみて凹なれば、物を廣大に見する事、ちかくは世に有髭鏡にてゑんぬべし、畢竟此遠目鏡も、爰の此道理にて、元來を工夫したるべし、尤五里十里までの堺を、眼前に見する仕かた、和の製作にも有とはいへど、唐渡ならでは、本來さいくに上品はなし、　月めがね、長崎ニ仕手あり、製作口傳、月を近く見せ、滿月ゟ半月の虧の分量をよく考みる、かけて月にむかひ瞬なし、　日目鏡、製作口傳、かげまばゆからずといふ、　日取目鏡、尤目鏡にかぎらず、炎天に水晶のほくちに火のうつる事、世に人の ゑれる事也、ゑかし此日取玉には、日の火をうくるを專に製作する、殊には ゑかけに少し傳もありて、火のうつる事早し、故に名とす、　月とり目鏡、これ滿月にむかひ、水を取やうに仕やう有、是も水晶の吉水にて玉をつくる、水をとる事すこし口傳、　五色目鏡、玉のうへを三角にし、すこし勾倍に見る、物の色五しきにうつる、　七ッ目鏡、六ッ五ッ、右みな同じ事也、一ッのすがた、七ッ六ッに見する事、玉を六角七角に中高にする、角の數に、物のしな形をわかつて見する也、　横三ッ目鏡、一ッの物、横に三ッに見ゆる、　逆目がね、總じての物さかさまに見ゆる、但筒にても作る、筒なしも作る、　八方目鏡、上下東西南北ゟ來たる人をうつすに、ことゞく玉の中に人影うつる、おらんだ人指にはめて指のかざりとす、　日蝕目がね、日蝕を見る目がねなり、肉眼にてはまばゆくして拜みがたし、水にうつしてもとくとは分明ならず、この目鏡にて見れば、目まばゆからずして、その細交を拜する事つまびらかなり、これ唐作の珍物也、他の物を見るには、羅をへだてたるがごとしとぞ、

〔雅遊漫錄三〕千里鏡